

かわらばん

ホームページ



平成31年3月

第237号

江戸時代の医師の実態

副院長 笹部 哲生

医者収入、家計などに関することは興味を引くお話ですが、現代の医者のをそれを書きますとあまりにも生々しく、ひんしゅくを買う恐れがありますので、ここでは、舞台を江戸時代にして、医者生活の一端を記します。

■ 医者の資格、修行 ■

江戸時代は、医者に試験、資格はなく、本人が宣言すれば医師になれました。ただし、患者が来るかどうかは別です。剣術と同様に流派があり、師匠に弟子入りして経験を積みます。著名な流派として、漢方の曲直瀬流、眼科の真島流、産科の中条流等があり、蘭学派もその一つです。他に、小石川養生所など、現代の医学校のような施設が江戸や諸藩に設立され、そこで修行を積む医師も多くいました。

■ 医師の身分 ■

医師には天皇家、幕府、諸藩に仕える御典医と町医に分かれます。江戸幕府では医師は僧侶と同じく身分外存在でした。その理由は、将軍やその家族の奥（寝所）に入ることのできる者の身分は、普通では非常に高い必要があります。緊急時にすぐに医師の身分を高めることはできないので、最初から身分の外にいたようです。また、いかなる身分からでも医師になることが認められておりました。

■ 医師の業務と収入 ■

-----幕府御典医

江戸城中での医療従事者で、以下のような職種があります。

典薬頭（てんやくのかみ）：代々御典医らの統率を主たる業務とし、通常2名です。直接城中で診療することは原則ありません。世襲役職です。俸禄：知行米* 1200~1500石（手取り約4千8百万円~6千万円）***

奥医師（おくいし）：将軍、およびその家族の診療を行います。内科、外科、産科、眼科、小児科、口内科、針灸医などの担当がおりました。世襲が多いですが町医からの抜擢もありました。

任官中役料 扶持米** 200俵（手取り約8百万円）***。

番医師（ばんいし）：城中での急病、怪我人の診療を行います。

世襲および町医からの抜擢がありました。

任官中役料 扶持米** 100俵（手取り約4百万円）***。

その他、将来の表番医師、奥医師になるための準備組織として、

小普請医師、寄り合い医師などがあり、小石川養生所などで研鑽を積んだようです。

-----町医

市中の農民、職人、商人だけでなく武士やその家族の診察・治療を行いました。御典医と厳密に区別されることはなく、人道的観点から、御典医でも非番の日は町医として診療を行うことは可能でした。試験などの基準がないため、技術に一定の水準というものはありませんでした。良医と評判の医師に患者は集まるため、町医の収入は千差万別です。医は仁術の矜持から施術料（問診、視診、触診等）は原則無料でした。主な収入は、薬代とその調剤料です。施術に対するお礼の気持ちも含めて薬礼として受け取っていました。薬礼に相場はありましたが、医師の格や患者の経済状況によって異なり、払わない（払えない）患者もいたということです。往診の場合の籠料などは別途出してもらえます。高名な医師になると年間収入は1000両（約一億円）***以上あったようです。

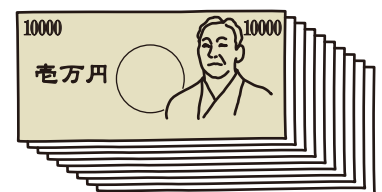
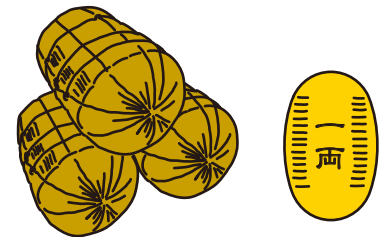
■ 現在との比較 ■

江戸時代の医師の収入と現在の医師の収入とは、びっくりするような違いはないように思えます。また、町医の収入の主たる部分が薬の値段であるという状況は、薬の仕入れ値と薬価が著しく乖離していた昭和の終わりまで継続していました。最近では、その差額はほとんどなく、医師が薬代で収入を上げることはできなくなりました。代わって、技術料が高く評価される医療費体系になってきております。現在の医療費の善悪はともかく、試験に合格した医師から、ほぼ全国均一の医療を受けることができるようになったことが、江戸時代と比べて、現在の医療体系の最大の進歩と言えると思います。

脚注 *：知行米 幕臣は四公六民のため手取りは4割。 **：扶持米 全量が収入。

***：米一石（約150Kg）= 米2.5俵 = 約一両 = 約10万円として計算。

参考書籍 上田秀人著 “表御番医師診療録”（角川文庫 13巻既刊）



私事ですが 数年前から手術や外来など診療のあとに疲れを感じるようになりました。このままではまずいなと思ってどうしたら毎日元気に過ごせるかなと悩んでいるところに出会ったのが漢方です。

さて女性の平均寿命は87歳ですが、健やかで元気に生活できる健康寿命は74歳です。

年齢が進むと、脂質異常症からくる虚血性心疾患、骨粗鬆症からくる大腿頸部骨折、排尿障害、更年期障害などが増えます。健康寿命を延ばすためには若い時代からの予防が重要です。これには運動、食事など生活習慣の改善が基本ですがホルモン補充療法や西洋薬のみならず漢方薬も予防的に用いるべきです。漢方薬は軽度の疾患や機能が低下した初期の病態や症状によく効きます。婦人科三大処方といわれる当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸は更年期障害だけでなくうつ症状にも効果があります。字数の都合で全部は紹介できませんが、静脈のうっ血には特に桂枝茯苓丸が有効ですし、水分分布異常からくる頭痛、しびれ、乗り物酔い、つわりには五苓散が著効します。胃腸虚弱には六君子湯、夏ばてや病後の体力低下には補中益気湯や人参養栄湯などがよく処方されます。

最近、外来で患者さんにおいしく食事して、よく寝て、よく喋って、よく遊んでいますかと尋ねています。その返事を糸口にして患者さんにあった予防医療を提案しています。漢方薬を含めた予防医療で健康寿命を延ばして有意義な人生を送りましょう。



外国語通訳について

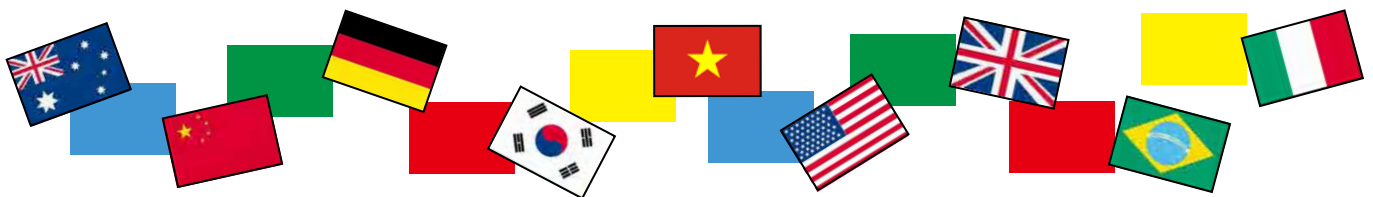
放射線科 山村好映

私は診療放射線技師として働きながら大阪府立病院機構本部に通訳者として登録をしています。病院にはいろいろな患者さんが来られますが、その中でも診療、検査などで通訳が必要な場面が多くなってきました。

外国語通訳は通訳する度に学びがあり奥が深いです。通訳は適切な表現を使う言語能力はもちろんのこと、その病気の医学知識が求められます。そのために予習と復習に勝るものはありません。また、言語の通じない場所で病気をわずらう方の繊細な気持ちの変化を受け止める心の広さも必要です。

外国語通訳は通訳コーディネータからの依頼で始まります。次に通訳が医師に連絡をとり、質の高い通訳を提供できるように話す内容を確認します。診察当日、患者さんと会った後は軽く会話をし、お互いの緊張をほぐします。診察中は自由質問が通訳の腕の見せ所です。時には通訳が医師に質問したり、患者さんへ訳することもあります。この時間は患者さんが病気について知識を得る時間であり医師が患者さんの治療へ向き合う様子を知る時間です。

患者さんの気持ちを柔らかく受け止め、毅然とした姿勢でいながらも病院で会わないことが最終目的地です。そのために全職種が全力でサポートしています。また、通訳する私を見守ってくれている周囲の方に感謝します。今ベトナム語の通訳を募集しております。



◆◆◆3月の教室案内◆◆◆

◆カンガルー教室	3月 6・13・27日	午後 1時30分～	第1会議室
◆アトピーカレッジ	3月 1・8・15・22・29日	午前10時～11時	第1会議室
◆アトピー教室	3月 1・8・15・22・29日	午後2時～3時	第2会議室